書評・書評

メドヴェージェフ著
石堂清倫訳

『共産主義とは何か』

中嶋嶺雄　評
（東京外国語大学助教授）

一九五六年のソ連共産党第二十回大会における「スターリン批判」以来、はやくも二十年近い歳月が経過した。そして、この間、いわゆる「共産世界」には、中ソ対立やフルシチョフ失脚、中国の「文化大革命」や林彪異変、ハンガリー事件からチェコ事件にいたる東欧動乱等々、実に多くの衝撃的なドラマが生起した。そうしたなかでの国際共産主義運動の停滞は、一方で「新左翼」諸潮流の抬頭をもたらしたが、わが国の赤軍派をはじめとする国際ゲリラや相次ぐ内ゲバ殺人事件などにいたるまで、共産主義諸潮流の混迷は、まさにスターリン主義の亡霊に憑かれたごとく、その一部に救いがたい「退行現象」を伴っていまもつづいている。このような状況において、それぞれの立場からスターリン主義とはなにか、を問うことは、いかにも容易であり、それは一つの流行でもあるようだが、しかしスターリン主義の誤謬を歴史の実態として実証的に剔抉し、スターリン主義の亡霊を実践的な意味においても日常的に検証してゆくことは、きわめて困難なことだといわねばならない。あの衝撃的な「スターリン批判」が敢行された一九五六年当時、フルシチョフ的「スターリン批判」に内在する限界を鋭く指摘し、ソ連社会と国際共産主義運動の全領域を蝕んでいたスターリン主義生成の基盤を、その社会的・制度的・組織的根源にまで遡って追究すべきことを提案したのは、当時のイタリア共産党書記長パルミーロ・トリアッティであったが、トリアッティのこのような問題提起にたいする回答は、今日まで、きわめて不十分なかたちでしかなされ得なかったといってよいであろう。

本書は、ある意味でトリアッティの問題提起や、そして暗示的にはアントニオ・グラムシの思想にも導かれて、スタリーン主義への追究をたんに理論やイデオロギーとしてではなく、膨大な量の記録や証言をそれに可能なかぎりのソ連共産党史関係文書によって、ソ連社会内部から果たそうとした記念碑的なスターリン時代史だといってよい。もとより、本書は、今日のソ連共産党によって公認され得るものではなかったが、それは、スターリンの犯した誤謬にたいし沈黙を守ることこそ新たな犯罪だと考える著者が、一個の共産主義者の責任においてスターリン時代の真実とその全貌を明らかにしようとした告発の書でもあるといえよう。それだけに一九六八年に「歴史をして裁かせよ――スターリン主義の起源と終結――」と題してソ連国内でタイプ印刷されたこの膨大なドキュメントが外部世

(演習) 法学者のメドヴェージェフとは？ 人物

界に伝わり、英・仏・独・伊の各国語に翻訳されたとき、多くの反響を呼んだのであった。著者のロイ・ア・メドヴェージェフは、今日、ソ連の反体制知識人として、ソルジェニーツィン事件でもサハロフ博士らとともに世界に知られるようになったが、著者が本書を執筆するにいたった動機は、まず第一に、スターリン主義は、いまなお、現実の運動にたいする脅威になっているばかりか、その復権の傾向にさえあることにたいして、いまこそ事実を語ることの恐怖をとりのぞかねばならない、と考えた点にあった。そして第二には、毛沢東体制下の中国共産党が、スターリン主義の論理の公然たる継承者としてあらわれていることにたいする深い危惧の念からであった。まさに、この点こそ、わが国の一部に見られるように、スターリン主義の告発者が、その裏返しとして毛沢東主義の讃美者、崇拝者に堕する傾向とは決定的に異なるところである。もとより著者は、だからといってトロツキー主義の立場から「極端な傾向性と一方性」をもってスターリン主義を告発するものではなく、レーニン死後のスターリン権力形成過程についても「スターリンの粗暴で専横なやり方と、トロツキーの多くの個人的および政治的な欠点」がこの過程を導いていったことをきわめて冷静かつ綿密に考証している。本書のなかの圧巻は、やはり二〇年代末期の農業集団化と工業化の時期におけるスターリンの経験主義的・主意的な政策上の誤謬が三〇年代の個人崇拝へと連なり、やがてキーロフ暗殺事件に発端する大粛清をもたらしてゆく時期を多くのデータによって執拗に記述しながら、スターリン主義発生の諸条件（個人崇拝、批判の自由の喪失、懲罰システム、党と国家の官僚化、保守主義と教条主義、教育と文化の不足、等々）とスターリンの権力横奪の方法を具体的に分析しているところにあるといえよう。そしてこのようなスターリン政治の断面は、たとえば、ソ連邦検事総長として、またスターリン国家論の吹聴者としてスターリン大粛清に奉仕したアー・ヤー・ヴィシンスキー（のちソ連外相）の審問記録を通じても克明に綴られている。こうしたプロセスを経て、旧トロツキー派、ブハーリン派、ジノヴィエフ派の幹部たちは根こそぎ粛清され、まもなく国家と党・地方の幹部たち、文学者や芸術家たちの大量粛清につながってゆくのだが、このような内政面での暴虐は、独ソ不可侵条約やフィンランド戦争、さらには対ユーゴスラヴィア政策やアジア諸国の民族ブルジョアジーにたいする「左翼主義的」な評価の誤謬へと連なり、国際共産主義運動のみならず、世界の人民にいかに多くの損失をもたらしたかが追究されている。本書には、たとえばアイザック・ドイッチャーの思想的立場についての誤解（下巻、五七五ページ）やスターリンの東アジア政策（中国、朝鮮、満洲）についてのやや皮相な理解（下巻、三九九ページ）など、外部世界との関連では、情報不足がもたらす若干の欠陥があるとはいえ、このように優れた実証的なスターリン時代史がソ連人の手によって成ったことこそ、まさに画期的なことである。

最後に、この膨大な書の訳業が石堂清倫氏という、本書の訳者としてもっともふさわしい碩学の手によって丹念に仕上げられたことにたいし敬意を表したいと思う。（三一書房 上一、七〇〇円 下二、五〇〇円）